
真那浦南の不発弾(ダッド・ボーイ)

史郎院彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダッド・ボーイ
真那浦南の不発弾

【Nコード】

N1977Z

【作者名】

史郎院彼方

【あらすじ】

百九十二センチという身長と、生まれつきである栗色の髪、前髪で顔の右半分を隠すなど、身体的特徴が多い十五歳の少年、雪村春。

まなつひ 父が職場で栄転を果たしたことで、生まれ育った奈良を出て、神奈川県真那浦市に引っ越し、真那浦市南部にある真那浦南高校に入学した。

中学時代を思い出しながら、春は切に願っていた。

「楽しくなくなつてええわ。平和に過ごせたらそれでええ……」

だが、ある出来事がきっかけとなり、春が新天地での高校生活にかけた望みは、入学から僅か一ヶ月と数日で、グラグラと揺らぎ始めていく……

「一緒に帰らない？」（前書き）

初めまして、史郎院彼方と申します。

今回、初めての小説執筆&投稿となります。

駄目な部分ばかりでお見苦しいものになると思いますが、よろしく願います。

「一緒に帰らない？」

5月も半ばとなったある日……まなつら 神奈川県真那浦市の真那浦南
高校……

朝の教室で、雪村春は誰とも話さず、窓際に一人佇み、ボンヤリとした表情で窓から見える景色を眺めていた。周囲の生徒たちはそんな春に近づき難いのか、談笑しながら遠目にチラチラと見ることはあるが、話しかけようとする者はいなかった。ただ一人を除いては……

「おはよう、雪村くん」

「……おはようさん……」

背中越しに聞こえた挨拶に対し、春は振り向きもせず小さな声で挨拶を返す。そんな春を見て、挨拶をした女生徒……北見愛奈は優しい気な笑みを浮かべた。

「……とりあえず、連絡事項はこんなところだ……じゃ、解散」

春のクラスを担当している、黒いスーツを着崩した女教師、浜崎のやる気の無い一声を受けて、生徒たちは自由に動き始める。席に着いたまま勉強道具を広げる者、帰り支度を整える者、部活動に向かう者と様々だ。

部活動に参加しておらず、勉強熱心でもない春は、今日出された課題するのに必要な物だけを鞆に入れて帰ろうとしていた。

「あの、雪村くん？」

春が教室の入り口まで歩いたところで、背後から声をかけられる。

「……なんや？」

「一緒に帰らない？私たちと……」

振り向いたところにいたのは、太陽のような笑顔の愛奈と、背

が低く目付きの鋭い女生徒だった。

（まさか……俺が誘われるやなんて……）

内心、非常に嬉しかった春は、いつもは無愛想な印象を与える
暗い表情が、少しだけ明るくなる。

「え……えっと……」

返事をしようとするが、思わず吃つてしまい、視線は宙を泳いでしまう。

（な、なに吃つとるんや俺……”ええよ”って言えばええだけやん
……あ、でも……）

一度は帰宅の誘いに応じようとするが、その瞬間、ある景色が
春の頭に浮かぶ。その景色は、自宅への帰り道とは反対方向にある
大きな鉄橋と、鉄橋の真下の河川敷だった。

「……今日は……ちよつと、用事があるんや……」

少しだけ考えてから、春は小さな声でそう言つと、愛奈たちに
背を向けて教室を出て行く。

「あ、ちよつと……」

すかさず愛奈が声をかけるものの、春は足を止めずに廊下を進
んで行った。

「なんなのアイツ？愛奈の誘いを断るなんて……愛奈？」

背の低い女生徒が不満気に呟いて、隣に立つ愛奈を見上げる。

「……………」

愛奈は春が出て行った教室の入り口に視線を向けたまま、ボン
ヤリとしていた。

「ちよ、ちよつと……なにボーツとしてるのよ？」

声をかけながら女生徒は愛奈のスカートの裾を引っ張るが、愛
奈には聞こえていないのか反応が無い。そんなやり取りを、教室に
残った生徒たちに見つめられたまま、時間だけが経過していくのだ
った。

「なあ、あれ……雪村だよな？」

「うん、雪村くん……だよね？すごく背え高いし、髪型も……ちょっと”あれ”だし……」

校門近くにいる生徒たちは、ヒソヒソと、内緒話をするように口元を隠して話していた。そんな彼らの視線の先にいたのは……

「北見……また誘ってくれへんかな……」

高校生活は、楽しくなくても平穏であればいい……そう考えていた春だったが……

「一緒に帰らない？」

愛奈の言葉が脳裏をよぎる。中学時代の自分に決してかけられず、高校でも自分には無縁と思っていた言葉が、春には単純に嬉しかった。

朝、教室で会ったびに”おはよう”と言ってくれる。多くの人にとってはあまりに些細なことかもしれないことにも、内心では大喜びしてしまう春にとって、一緒に帰らないかと誘われたときの嬉しさを、心の中にしまっておくことは出来ず、表情は緩み、思わず鼻歌まで歌ってしまうのだった。

普段の春の印象からはあまりにかけ離れたその様子に、周囲の視線を集めてしまっていたが、少しも気にすることもなく、春は学校をあとにするのであった。

「やっぱ……かわええなあ……」

「……あ、あれ？」

放課後の教室……春が教室を出てから、しばらくボンヤリとしていた愛奈は、ハッと我に帰り、辺りをキョロキョロと見回す。

「……大丈夫？ いったいどうしちゃったの？」

心配そうな表情を浮かべながら、隣に立つ背の低い女生徒は愛奈のスカートの裾をギュツと掴んで愛奈の顔を見上げる。

「あ、加奈江ちゃん……私……」

「まったく……その立派なお胸様をこう……モミモミ……っとしても、まるで反応が無いんだもん。ちょっと心配しちゃったわよ」

キョトンとしている愛奈のスカートから手を離れた、加奈江と呼ばれた女生徒は、両手を少し前に出して、胸を揉む仕草を見せる。

「？……も、もお……！ それやめてって言うてるのに……」

加奈江の手の動きを見て、愛奈は頬を赤らめながら、腕で胸元を隠す。

「デヘヘ……相変わらず、可愛いリアクションしてくれますなあ……」

愛奈の反応を見て、加奈江は新しい玩具を手にした幼子のような笑みを浮かべつつ、その表情に似つかわしくない下卑た笑いを漏らした。

「……バカア……もう知らないっ」

頬を赤くしたまま、加奈江を置いて一人早足で、教室を出て行く。

「アハハ、ちょっと待ってよお……」

そんな愛奈を追って、加奈江もまた早足で、教室を出て行くのだった。

「……あいつら、なんも変わらないとええんやけど……」

春が買い物客で賑わう商店街を抜けて少し歩くと、あまり年季の入っていない鉄橋の前に辿り着く。

かつてこの地を治めていた戦国武将の名前から、麻芽橋あさめばしと名付けられた鉄橋。利保川を境として北部と南部に区切られた真奈浦市……この鉄橋は、その二つを繋ぐいくつかある橋の一つである。

春は落ち着きの無い様子で周囲を見渡す。これからの自分の行動を、街の者ならともかく、真奈浦南高校……通称”南校”に通う者には見られたくないからだ。特に、自分に声をかけてくれる唯一のクラスメイトには……

（前後左右、よう確認して……と……）

真奈浦南高校の生徒であることを示す紺色のブレザーが見えないことを確認すると、そそくさと河川敷へ下りて行った。

「……よう、元気やったか？」

河川敷へ下り、麻芽橋の真下に位置する場所に来ると、春はそこにいた、二匹の猫に声をかける。一匹は三毛猫、もう一匹は黒猫で、二匹とも雌の成猫であった。そんな二匹の猫に向けて発された声は小さいものの、普段とは違い、とても気さくな印象を感じさせる。

春に気付いた二匹の猫は、特に警戒した様子もなく、春の足元に近づいてくる。

「やっぱ……かわええなあ……」

春はその場にしゃがみ込むと、近づいてきた二匹の猫の頭や背中を撫でる。撫でられた猫は、黒猫は目を細めながらゴロゴロと喉を鳴らして喜びを表現し、三毛猫は特に気にもしない様子だが、たまに撫でる手を離すと、それに抗議するように身を寄せてくる。

「また、家に帰んのが遅なってしまうな……」

猫たちを撫でながら、春は小さく笑みを漏らした。

「退屈だあ……」

商店街の中にひっそりと存在する小さな古本屋の中……桜庭冬樹は
さくらば ふゆき

立ち読みに興じながら、溜め息を吐いた。
この古本屋には若い者が滅多に來ない為、ほとんどの客は、初老をとくに過ぎた昔からの常連客である。そんな彼らの一部に、珍しいモノを見るような目で見られていた冬樹だったが、それは、若い客がいる珍しさだけでは無い。黒いニット帽を被り、赤色のパーカーの上から南校のブレザーを着たその体は、どこの力士かと思われるほど大きく、力強さを感じさせる体躯をしていたのだ。

「あー……駄目だ。今日はもう帰るか……」

小さく独り言を呟きながら、冬樹は読んでいた本……数学の参考書を本棚にしまい、出口に向かう。

（つたく……ロクの野郎、三年になった途端に、つれなくなりやがって……）

「……クソッ……ホント、つまんねえ……」

古本屋の出口まで來た冬樹は、一言だけそう漏らすと店を出て行くのであった。

「……うん?」「そ、うん」

利保川の河川敷で猫たちと戯れていた春だったが、ふとあることに気がついて、猫たちを撫でる手を止めた。

「そういえば……名前、つけてへんなあ……」

猫たちから手を離して、春は考え始める。

（三毛猫がミケで、黒猫がクロ……いやいや、それやとちょっと……）

地面をじつと見つめたまま、春は深く考え込んでいく。猫たちは、撫でるのをやめたのが不満なのか、黒猫は後ろ足で立って春の右足の脛に前足でしがみつき、三毛猫は、左足の脛にピタツとくっついた。

だが、それにもまったく気づかずに、春の考え事は続く。

（ここは神奈川やし……神奈川いうたら、鎌倉……鎌倉幕府……頼朝と義経……北条政子と静御前……）

「マサコと……シズカ。うん、ええかも……ん?」

地面を向いていた顔を少しだけ上げて、春は猫たちが自分にくっついてにすることに気付く。

「あ、ああ……すまん、放つたらかしにしてしもて……」

春はそう言っ、猫たちと再び戯れようと手を伸ばした、そのとき……

「おーい、ちよつといいかあ?」

背後から、突然声が聞こえる。それが自分に向けられたものかと思い、春はしゃがみ込んだまま、背後に目を向ける。猫たちは少年たちを見ると、すかさず背を向けて走り出して行った。

「あ……はあ……」

猫たちが離れて行ったのがわかり、思わず溜め息を吐いてしまった。目を向けた先に立っていたのは、黒い学生服を着た三人の少年。その先頭に立つ、裾が腰より少し上の辺りまでしか無い学生服

を着た、茶髪の軽そうな少年は、見下すかのように春に視線を向け、その後ろにいる二人……顔が瓜二つで、髪の色以外は一致してるところを見ると、双子であると思われる金髪と銀髪の少年は、不安気な表情で立っている。三人とも、学生服の襟には、一年生であることを示す、英数字の”1”を象った襟章を付けていた。

「えつと……俺？」

自分に声をかけたに違いないと思いつつも、そうでないことを心の中で祈りながら、春は自分を指差してそう言ってみた。

「……そうそう、俺あ真奈浦中央の陣内って者なだけだよあ、ちよつと頼みたいことがあるんだよなあ……」

真奈浦中央高校……真奈浦市南部から麻芽橋を渡ってすぐのところにある朝永地区ともながに存在する男子校である。

「……むう……」

春は、関わりたくないという気持ちから溜め息を吐きそうになるが、これまでの経験から、それが聞かれたら面倒なことになると瞬時に判断し、溜め息を堪えながら立ち上がる。

「うわあ……」

「やつぱり……背え高っ!!」

陣内の後ろにいる双子は、立ち上がった春を見て、口を半開きにしている。その表情は、更に不安の色を濃くしていく。

（こういうでかいヤツに限って、見かけ倒しだったりするんだよなあ……）

心の中で意地悪くそんなことを言いながら、陣内は話を続ける。
「頼みたいことってのはあ……このことなだけだよあ……」

自分より大分背の高い春の顔を見上げながら、それに驚くこともなく笑みを浮かべた陣内は、地面を指で差し示す。

「……ここ？」

「そ、ここ」

春もまた、地面を指差し、首を傾げながら陣内の顔を見る。

「ぶっちゃけた話……ここ、なんか快適そうだからさあ、俺らの溜まり場にしてえんだけど……良いよなあ？」

そう言っで、春の顔を見上げる陣内の目が、獲物を見つけた猛禽類のように鋭くなる。その目は、拒否は許さないという明確な意思を示していた。

（勝手にしたらええ……っって言ったら、もうここには近寄れん……ここで、あいつらと遊べんようになってまう……でも、こういうやつらとはもう関わりとくないし……）

高校入学から一ヶ月半……あまり楽しくはないが平穩だった春の高校生活に、急激な変化が訪れようとしていた。

「せいぜい、愉しませてくれよな……」

無言のまま、陣内の”頼みごと”に応じるべきか悩み続ける春……そんな彼の様子に業を煮やしたのか、陣内は突然、両手で春の胸ぐらを掴み……

ドンッ！

「ッー！」

春の体を壁に押し付けた。一度考え込むと周りが見えなくなる
ことが多い春は、突然のことに思考が追いつかず、なすがままであ
った。

「い、い、よ、なあ？」

薄っすらと笑みを浮かべ、一言一句を強調して言う陣内は、胸
ぐらを掴んだ手の握力を強め、顔を春に近づける。

（……あいつらと遊べんようになるんは……やっぱ嫌やな……うん
……）

「……駄目や」

考えをまとめた春は、陣内を睨みつけて言い放つ。

「……はあ……」

春の言葉を聞いた陣内は小さく溜め息を吐き、胸ぐらを掴んだ
手を離しかと思うと、すかさず春の頬目掛けて拳を叩き込んだ。

「ぐっ……」

「もう一回聞けど……良いよなあ？駄目ってこたあ無いよなあ……
なあ？」

再び胸ぐらを掴み、陣内は顔をグイッと近づける。その顔から
は、笑みが消え、目付きは鋭さを増していく。

「……なんべん聞かれても……駄目なもんは駄目や……」

「……しょうがねえなあ……おーい二人とも……こいつ抑えろ……」

「お、おう……」

「わ、わかった……」

陣内の言葉を聞いて、その後ろでハラハラとした様子で見ていた双子は、それぞれが春の両隣に移動して、腕を掴んで春を膝立ちにさせる。春は抵抗しようとせず、膝立ちの姿勢で俯いていた。

「おら、顔上げろ……ん？」

俯いた顔を上げさせようと、春の長い前髪を掴んで引つ張った陣内は、あることに気付く。

「なるほど……変な髪型だとは思ってたけど、そういうことかぁ……」
「……くっ……」

春の前髪を掴んだまま、陣内はニヤリと笑った。陣内の視界に写る春の顔の、長い前髪で隠されていたところには、大きな傷痕があった。その切創は、眉の上辺りから、頬まで真っ直ぐに走り、瞼は開かなくなっていた。

「見られんのが恥ずかしくて隠してたってのかぁ？乙女かよお前はぁ……クックックッ……」

「……どうでもええやろ……」

心底馬鹿にしたように笑う陣内に対し、春は、睨みつけながら静かに呟く。

「確かに……どうでもいいやぁ……」

そう言って陣内は、前髪を掴んだ手を放すと同時に、春の腹に蹴りを放つ。

「うっ……くう……」

腹部への衝撃に、思わず苦悶の表情を浮かべる春……そんな春の様子を、陣内は心底楽しそうに見つめる。

「さて、と……せいぜい、愉しませてくれよ……」

これから、目の前にいるヤツを好きなだけ痛めつけることが出来る……そう考えただけで、陣内の加虐心には火が点き、その火は瞬く間に、大きく禍々しい炎となっていく。

だが春は、これから自分が受ける暴力に対する恐怖は無い。恐

れているのは、また別の事……

(……絶対に耐えたる……そうせんと俺の居場所は……せやから、耐えられんようになってブチ切れるんだけは、絶対あかんのや……)

感情の暴走……かつての自分は、それが原因で多くの人たちを傷付け、春自身も多くの傷を負い、しまいには右目の光を失った。

(……負けへん……暴力にも、俺自身の感情にも……)

顔を地面に向けた春は、そう心に強く言い聞かせながら、顔を上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1977z/>

真那浦南の不発弾(ダッド・ボーイ)

2011年12月10日22時45分発行